

宇陀を駆けた人々



北畠親房 篇1

北畠親房の生い立ち

鎌倉時代末期から室町時代前期（南北朝時代）に、後醍醐天皇の側近として仕え、灌頂寺（榛原福西）で亡くなったとも言われている北畠親房とその後の北畠氏についてご紹介しましょう。

親房は、代々、公家として天皇に仕えていた北畠一族に生まれました。元々、北畠氏は、村上天皇の血をひく者が京都の北畠に住んでいたことから、その地名をとつて北畠と名乗り、代々、天皇家に仕えていました。親房自身も公家として天皇に仕えており、かなり高い地位まで上り詰めます。

特に後醍醐天皇の時代に高い地位を与えられました。また、貴族（公家）の教育機関の代表者となり、源氏長者（天皇から連なる源氏一族全体のトップ）にもなります。38歳の時に一度僧となり、中央の政治とは一旦距離を置きますが、後醍醐天皇によって鎌倉幕府が滅ぼされると再び朝廷に復帰します。

親房は、息子の顯家らと共に東北の武士集団を朝廷の支配下にするために陸奥国（現在の宮城県）の多賀城へ行きます。多賀城は、東北地方を統括する拠点として機能していきます。

次第に後醍醐天皇による新しい政治体制が整えられていますが、これを快く思わない人が現れます。それは後に室町幕府を開く足利尊氏が率いる武士集団です。尊氏は、鎌倉に独自の武家政権を確立しようと画策し、それをよしとしない後醍醐天皇は、尊氏の討伐を命令しますが、逆に尊氏に京都から追い出されてしまいます。都を追い出された後醍醐天皇らは、どのように尊氏らと戦うのでしょうか。

